自然学校実践事例集

自然等との感動的な出会い、集団での学びと連帯感、社会的自立へのステップ

兵庫県教育委員会

はじめに

長期宿泊体験活動をめぐっては、中央教育審議会答申（H20.1 月）において、自己が明確になり、自覚されるようになる小学校の時期においては、自然の偉大さに出会ったり、身近な学校の仲間とのかかわりを深めたりする自然の中での集団宿泊活動が大切であることが示されました。この答申を踏まえ新小学校学習指導要領では、自然の中での集団宿泊活動などの、自然に親しむとともに、好ましい人間関係を形成したり、連帯感を深める体験活動の推進が明記されました。

また、国においては、１週間程度の長期集団宿泊活動を通して、社会性や豊かな人間性をはぐくむため、総務省・農林水産省・文部科学省が連携した「子ども農山漁村交流プロジェクト」を平成20年から実施しました。

これらの国の動向は、県民の協力を広く得ながら20年前から全国に先駆けて取り組んできた兵庫県の自然学校をモデルとするものであり、自然学校の教育的役割は益々重要性が増しています。

本県では、昨年度、自然学校実施20年目を機に学識経験者等を構成メンバーとする「自然学校評価検証委員会」を設置し、自然学校の成果・課題を踏まえ、今後の充実方策について検討を行いました。

同委員会からは、①学校では経験できない自然や社会等の様々な体験活動を通して、豊かな人間性や問題解決能力などを育成する自然学校とすること。②社会の要請や子どもを取り巻く環境の変化に対応した自然学校として、各学校が自然学校のねらいを明確にし創意工夫した取組が大切であること。③小学校６か年を見通した体験活動の充実を図ることが大切であること等の貴重な提言を得ることができました。

また、平成21年度からは、①平成19年度から計画的に実施してきた小学校３年生を対象とした環境体験事業が全校実施となり、本県の小学校段階における体験活動の実施体制が整うこと。②自然学校評価検証委員会から命の大切さ等を発展的に学ぶため、環境体験事業と自然学校との系統性、関連性をもたせることが提言されたこと等を踏まえ、各学校及び各市町教育委員会の判断により、事業の重点化や実施期間の弾力化が図られるようにするなど、各学校の創意工夫した取組を支援するよう条件整備を図ることとしました。

本書は、自然学校評価検討委員会で提言された６つの方策と自然学校の弾力的な実施のあり方を、新学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえながら具体的な実践事例として示したものです。

各学校においては、ここに収録した実践事例を参考に、自然学校の推進テーマである**「自然等との感動的な出会い、集団での学びと連帯感、社会的自立へのステップ」**をもとに、特色ある自然学校が創造されることを期待します。

平成21 (2009) 年３月

兵庫県教育委員会

自然学校の充実を図るための方策と実践の工夫
（本資料で紹介する事例）

方策1 自然学校と他の教育活動との関連を図る取組の充実

- 総合的な学習の時間との関連を図った取組（事例①） …… p.4
- 道徳の時間との関連を図った取組（事例②） …… p.5

方策2 事前・事後の学習活動の一層の充実

- 活動全体を通してテーマ性のある取組（事例③）…… p.8
- 事前・自然学校・事後を通し「言語活動」を充実させる取組（事例④） …… p.9

方策3 学校では得難い体験活動プログラムの一層の充実

- ゆとりある滞在型プログラムで失敗・成功体験を重視した取組（事例⑤）…… p.12
- 感動体験プログラムなどフィールドの特性を生かした取組（事例⑥）…… p.13

方策4 社会性や自立性等をはぐくむための集団活動の充実

- グループ活動や集団生活など社会性の育成を重視した取組（事例⑦） …… p.16
- 困難を乗り越えるプログラムなど自立性を重視した取組（事例⑧） …… p.17

方策5 子どもの成長過程を踏まえた体験活動の充実

- 環境体験事業との関連を図った取組（事例⑨） …… p.20
- 高学年として自己を見つめさせる活動を取り入れた取組（事例⑩） …… p.21

方策6 家庭や地域との一層の連携を図る取組の充実

- 家庭との連携を重視した取組（事例⑪） …… p.24
- 地域との連携を重視した取組（事例⑫） …… p.25

方策7 自然学校の弾力的な実施

- まとまりのある自然学校（４泊５日）の取組（事例⑬） …… p.28
- 集団での学びを核とした長期計画（６泊７日）の取組（事例⑭） …… p.29

本資料の活用に当たって

本資料では、自然学校の取組は黄色表示しています。また。自然学校を充実させるための「事前・事後体験活動」は緑色で表示し、自然学校の準備など「事前・事後指導」と区別しています。

○「事前・事後体験活動」の条件

自然学校を充実させるための非日常的な体験活動であること。

※【参考】「事前・事後指導」（「事前・事後体験活動」に該当しない活動）の例

- 自然学校の準備物や生活上のルールづくりなどの話し合い活動や「しおり」作成
- 自然学校の実施場所やプログラム内容について、図書室等で行う調べ学習
- 野外炊事のための家庭科室での調理実習
- 自然学校実施後の体験活動発表会　等

方策1　自然学校と他の教育活動との関連を図る取組の充実

【評価検証委員会の提言内容】

教育課程上の位置付けの明確化

自然学校は、特別活動の学校行事を基本とし、ねらいに応じて総合的な学習の時間や道徳との関連を図るなど、教育課程への位置付けを明確にして実施することが大切である。

自然学校での学びを普段の教育活動に生かす工夫

体験を通した多様で実感を伴った学び方を普段の授業や教育活動に取り入れることが大切である。

日常につながる非日常体験の充実

非日常的な体験を通して、自然等との感動的な出会いや新たな気付きなど、自然学校での豊かな学びが他の教育活動や生活に生きることに価値がある。

【実践への期待！】

○　自然学校の目的を明確化し、自然学校での豊かな学びと総合的な学習の時間との関連を図り、「体験活動プラス探究型」のダイナミックな学習に取り組むことが期待される。

○　集団活動を通した友だちとの協力の大切さや、自然体験を通した命の尊さなど、豊かな体験を通して内面に根ざした道徳性の育成や道徳的実践の質を高めることが期待される。

「総合的な学習の時間との関連を図った取組」のポイント

◆自然学校のすべてを総合的な学習の時間として実施するのではなく、自然学校の「めあて」と、問題解決能力や協同的に取り組む態度などの総合的な学習の時間の目標を照らし合わせた上で、自然学校における探究活動の一部や事前・事後の学習を総合的な学習の時間として位置付けることが大切である。

≫≫≫事例①（p. 4）

「道徳の時間との関連を図った取組」のポイント

◆自然学校との関連を考慮しながら、内容項目をもとに、育成する道徳性を明確にし、道徳の時間の年間指導計画に位置付けるなど、計画的に体験活動を生かし、道徳の時間を充実させることが大切である。

≫≫≫事例②（p.5）

総合的な学習の時間との関連を図った取組

事例①　森からのメッセージを受け止めよう

1　取組のねらい

○　森の持つ神秘性や森が多くの命をはぐくんでいることを実感させる。

○　森と人とのかかわりについて協力して探究し、森の環境を守ることの大切さに気付かせる。

2　全体の構想

事前指導

ア　森と人のかかわりを調べる課題づくり

総合的な学習の時間

→

自　然　学　校

イ　森にふれる活動 → ウ　森についての探究活動 → エ　森を楽しむ活動

→

事後指導

オ「森はすごい！新聞」づくりと配付

総合的な学習の時間

3　具体的な展開

ア　森と人とのかかわりを調べる課題づくり　総合的な学習の時間

○国語の時間における「森林のおくりもの」（教科書教材）の学習をきっかけとして、森について調べる課題別のグループをつくり、活動計画を立てる。

- 森と人の歴史グループ
- 森の仕事(産業)グループ
- 森の生き物グループ
- 森と水の役割グループ

自　然　学　校

イ　森にふれる活動　特別活動

- 登山
- オリエンテーリング
- 鳥の鳴き声クイズ
- ナイトハイク（暗闇体験）

ウ　森についての探究活動　総合的な学習の時間

- 地域の人から炭焼きの歴史の聞き取りと炭焼き体験
- 林業従事者からの聞き取りと枝打ち体験
- ネイチャーガイドと一緒に森の生き物探し
- ボランティアの人と川の水質調べ

エ　森を楽しむ活動　特別活動

【選択プログラム】

- 隠れ家づくり
- 間伐材でのものづくり
- 森の素材で楽器づくり
- 木登り　等

オ　「森はすごい！新聞」づくりと配付　総合的な学習の時間

○自然学校の報告書を新聞形式にまとめて校区に配るとともに、現地でお世話になった人たちに届ける。

4　ここを大切に

○　現地の森で感じたことをもとに活動計画を変更することを認め、探究活動の幅を広げさせる。

○　自然学校における活動のねらい及び教育課程上の位置付けを明確にする。

道徳の時間との関連を図った取組

事例②　「みんなのために」から始めよう

1　取組のねらい

○　自分の役割を自覚し、主体的に責任を果たそうとする心情を培う。

○　身近な集団での活動に進んで参加しようとする態度を養う。

2　全体の構想

事前指導

ア　みんなのために役立ったこと

道徳の時間

自　然　学　校

イ　アクション！「みんなのために」

ウ　みんなのためにがんばったこと

事後指導

エ　学級活動「みんなのために」から始めよう

特別活動

3　具体的な展開

ア　みんなのために役立ったこと　道徳の時間

○道徳の時間において「みんなの中で君がかがやく」（文部科学省道徳教育推進資料）を使った学習を行う。

今までにみんなのために役立ったと思うことは、どんなことですか。

・困っている友達を助けてあげた
・係活動でみんなが楽しめる企画を考えた
・学級園の水やりを続けている
・一人ぼっちになる子がいないように声をかけた　等

自　然　学　校

イ　アクション！「みんなのために」

○活動日の1日をアクション・デーとし、「みんなのためにできる行動」を計画し、実行する。
・みんなに話しかけよう。
・ゴミが落ちていたら、すすんで拾おう。
・きれいに飯ごうを洗おう。等

○夜の振り返りの時間に１日の行動についてグループで話し合う。

ウ　みんなのためにがんばったこと

○みんなのために頑張っていた友達の姿を活動最終日に報告し合う。
・カウンシルファイヤーや退校式のプログラムで実施

エ　「みんなのために」から始めよう　特別活動

○「みんなのために行動できたか」を中心に自然学校での集団生活を振り返り、学級等の集団における自己の役割について話し合う。

4　ここを大切に

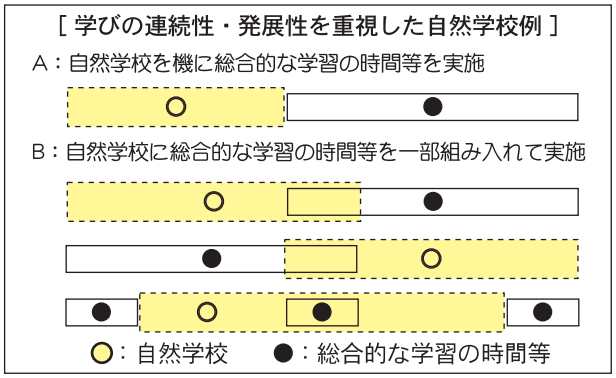
○　自然学校期間中に振り返りの機会を持ち、その後の行動につなげる。

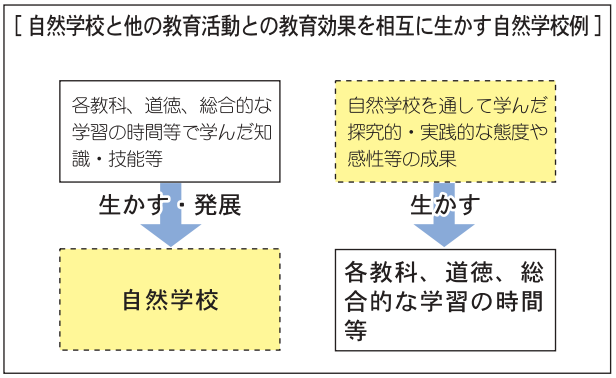
○　学級における係活動や委員会活動、また、家庭における役割などにもつなげる。

資　料

■自然学校の充実のために

自然学校と総合的な学習の時間の関連を図り、自然学校を「体験活動プラス探究型」の学習の場として展開したり、自然学校で学んだ自然のすばらしさ、優しさ、恐ろしさなどへの感動をもとに、道徳教育との関連を図ったりする取組も考えられる。





「生きる力を育む自然学校」自然学校評価検証委員会（H20.3）より

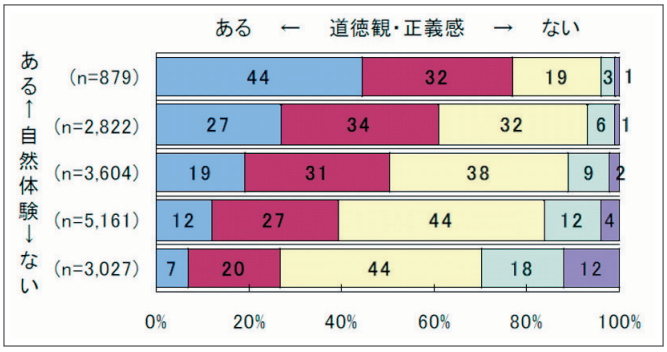
体験活動は今！

道徳教育と体験活動

■小学校学習指導要領　第1章 総則（H20.3.28）

道徳教育を進めるに当たっては、教師と児童及び児童相互の人間関係を深めるとともに、児童が自己の生き方についての考えを深め、家庭や地域社会との連携を図りながら、集団宿泊活動やボランティア活動、自然体験活動などの豊かな体験を通して児童の内面に根ざした道徳性の育成が図られるよう配慮しなければならない。その際、特に児童が基本的な生活習慣、社会生活上のきまりを身に付け、善悪を判断し、人間としてしてはならないことをしないようにすることなどに配慮しなければならない。

自然体験が豊かな子どもほど道徳観・正義感が強い



参考：調査にかかる質問項目(抜粋)

■自然体験について
- 海や川で貝を取ったり、魚を釣ったりしたこと
- ロープウェイやリフトを使わずに高い山に登ったこと
- 太陽が昇るところや沈むところを見たこと

■道徳観について
- お風呂洗いをしたり、窓ふきを手伝うこと
- バスや電車で体の不自由な人やお年寄りに席をゆずること
- 友達が悪いことをしていたら、やめさせること

「青少年の自然体験活動等に関する実態調査」独立行政法人国立青少年教育振興機構国立オリンピック記念青少年総合センター（H18.12）より

方策 2　事前・事後の学習活動の一層の充実

【評価検証委員会の提言内容】

子どもにとっての自然学校の目標の明確化

事前・自然学校・事後を通した食生活を見直す学習や活動を行うなど、自然学校に一定のテーマ性を付置し、子どもたちにとって自然学校のめあてを明確にすることが大切である。

事前・自然学校・事後を通した言語活動の充実

事前・自然学校・事後を通して、記録・レポート・話し合いなどそれぞれの段階に応じた言語活動に取り組み、自然学校での学びを充実させることが大切である。

子どもの自己・相互評価の重視

事前指導の充実とともに、自然学校のねらいや目的に基づく評価シートなどを活用して、気付いたり感じたりしたことをクラスや学年全体で共有し、自然学校での豊かな体験が広い認識につながるよう事後指導を工夫することが大切である。

【実践への期待！】

○　事前･自然学校･事後を含めた全体計画を作成し､テーマ性やストーリーのある自然学校を実施することで､自然学校を通して｢児童に何を学ばせるか｣を明確にすることが期待される。

○　言語活動は､友達とのコミュニケーションを図りながら自らの考えを深める上で重要な活動であり､事前･自然学校･事後を通して意識的に言語活動を取り入れることで　､自然学校をより充実させることが期待される。

「活動全体を通してテーマ性のある取組」のポイント

◆自然学校のねらいを子どもたちが理解し、それらを達成するための活動が一つのテーマに基づいて構成されるよう、子どもたちが計画段階からプログラムやルールづくりに主体的に取り組むことが大切である。

≫≫≫事例③（p. 8 ）

「事前・自然学校・事後を通し「言語活動」を充実させる取組」のポイント

◆体験活動を通して気付いたことを記録したり、学んだことを振り返りながらまとめたり、発表し合ったりするなどの言語活動を工夫し、児童自らが体験活動を通して学んだことを認識することが大切である。

≫≫≫事例④（p. 9 ）

活動全体を通してテーマ性のある取組

事例③　食材をゲットしよう

1　取組のねらい

○　食生活に関する正しい知識を身に付けるとともに、自然の恵みの大切さ、「食」への感謝の気持ちを持たせる。

○　生涯にわたって自分の心と体の健康に気を付けようとする態度を養う。

2　全体の構想

事前指導

ア　食材調達ウォークの計画

自　然　学　校

イ　食材調達ウォーク

ウ　収穫祭パーティー

事後指導

エ　食生活改善会議

3　具体的な展開

ア　食材調達ウォークの計画

○現地の農産物等を調べて、食材マップにまとめる。
- 栄養教諭による話（「食」と「体」、栄養バランス、食材選び、衛生管理、安全管理　等）
- 食材調査
- マップづくり
- 校区との比較

○調達する食材ごとにグループに分かれ、農家へ依頼する。
- 米、野菜、名水、卵　等
- 電話、手紙等

自　然　学　校

イ　食材調達ウォーク
- ウォーク行程表の作成
- 現地の農家訪問
- 農家の人の話
  - 作る人の思い
  - 減農薬への取組
  - 野菜等ができるまで
- 農作業体験

ウ　収穫祭パーティー
- 調理計画
- 栄養素チェック
- 野外炊事
- お品書き作成
- 地域の方を招待しての会食

エ　食生活改善会議

○何気なく食べている日常の食事を振り返り、安全でバランスのとれた食事について考える。
- 自分の食事チェック
- 食生活改善計画の作成
- 学校農園づくり
- 参観日を活用した「めざせ食生活改善」発表会　等

4　ここを大切に

○　農家の人の生の声を聞くなど、具体的な体験を通してテーマを意識させる。

○　食材調達ウォーク時など、児童の安全確保に対する十分な体制づくりを行う。

事前・自然学校・事後を通し「言語活動」を充実させる取組

事例④　「計画シート」や「振り返りカード」などを活用しよう

1　取組のねらい

○　「話し合う」・「記録する」・「まとめる」・「発表し合う」等の言語活動を取り入れて、体験した事柄を客観的にとらえさせる。

○　児童一人一人の思いを大切にしたプログラムづくりを通して、児童の主体的な活動につなげる。

2　全体の構想

事前指導

ア　「計画シート」の作成

→

自　然　学　校

イ　「計画シート」の見直し（修正・調整）

⇒

ウ　「振り返りカード」による自己評価

→

事後指導

エ　「振り返りカード」の活用

3　具体的な展開

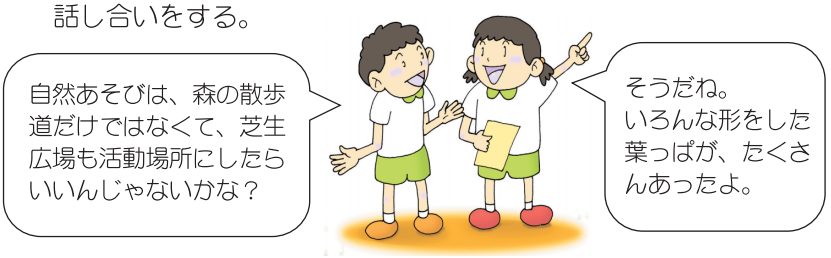
ア　「計画シート」作成

○一人一人の児童が、めあてや活動内容について考える。
○児童が分担して、活動場所についての情報を収集する。
○グループで活動内容や活動時間、役割分担などを話し合う。
○話し合いにより、グループのめあてや活動の見通しを明確にする。
○グループで協力し、表現方法を工夫してわかりやすくまとめる。
○計画を発表し合い、他のグループと意見を交流する。
（他のグループの意見を参考に計画を練る。）

自　然　学　校

イ　「計画シート」の見直し(修正・調整)

○事前に収集した情報と現地を比較して活動計画を見直すための話し合いをする。

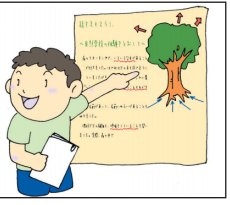


ウ　「振り返りカード」による自己評価

○「振り返りカード」(活動記録等)をもとにグループごとに感想を発表したり、活動を自己評価したりする。

エ　「振り返りカード」の活用

○「振り返りカード」（活動記録等）をもとに、発表会を行ったり、壁新聞・記録集等を作成したりすることを通して、身近な人に自然学校で感じたこと、学んだことを伝える。



4　ここを大切に

○　話し合いや振り返り等の活動に具体的な言語活動を位置付けるとともに、集団で考える時間を十分に確保する。

○　活動形態を工夫し、一人一人が自分の思いや考えを伝えることのできる環境づくりを行う。

資　料

■目標設定と活動の振り返り

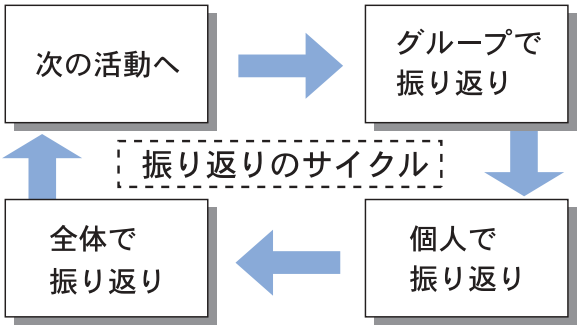
活動を通して体験したことをそれだけで終わらせないために、活動を共にした仲間と活動中の出来事について思い出し、意味付けをすることで「体験からの学び」を充実させる必要がある。活動を振り返らせるためには、活動ごとに全体の目標とそれに基づくグループの目標、そして目標達成のための個人のめあてをしっかりと持たせるとともに、振り返りによって得た学びを次の活動につなげていくことが大切である。

また、振り返りの際には、話し合うだけではなく、書く作業を通して個人・グループの考えを深めることが大切である。

目標設定の例

■全　体
「みんなで力を合わせて、山を登り切る」
↓
■グループ
「グループのペースを考えながら登る」
↓
■個　人
「しんどそうな子に声をかけて励ます」

活動の振り返り



体験活動は今！

言語活動と体験活動

■中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（H20.1.17）

体験活動をその場限りの活動で終わらせることなく、事前に体験活動を行うねらいや意義を子どもに十分に理解させ、活動についてあらかじめ調べたり、準備したりすることなどにより、意欲を持って活動できるようにするとともに、事後に感じたり気付いたりしたことを自己と対話しながら振り返り、文章でまとめたり、伝え合ったりすることなどにより他者と体験を共有し、広い認識につなげる必要がある。

■小学校学習指導要領　第6章 特別活動（H20.3.28）

自然体験や社会体験などの体験活動を充実するとともに、体験活動を通して気付いたことなどを振り返り、まとめたり、発表し合ったりするなどの活動を充実するよう工夫すること。

方策 3　学校では得難い体験活動プログラムの一層の充実

【評価検証委員会の提言内容】

子どもたちの心と体の解放

自然をフィールドとした活動が持っている本質の一つは、空間的・時間的な非日常への解放であることから、実施場所の自然環境を子どもたちがフルに活用し、豊かな体験活動を行うことが大切である。

地域の特性を生かし、学校教育では得難い教育効果を想定したねらいの設定

自然学校では、早朝や夜間など、通常の学校教育の内容や環境では得難い活動が可能であるため、多様な観点からねらいを設定することが大切である。

自然の本質にふれたり、達成感を味わったりするプログラムの設定

朝日や夕日を見る、闇や真の静けさを体験する等、自然界の根源的なことへの出会いを通して、自然が容易にコントロールできないことや日常で考えていた自然観とは異なった自然観に気付くような体験も大切である。

教師のプログラム開発力の向上

子どもの目線に立ち、子どもの状況や環境に応じて柔軟にプログラムを実施するなど、教師の専門性や指導力を高める研修の場や情報交流できる場を増やすことが大切である。

【実践への期待！】

○　児童の発想を取り入れたゆとりあるプログラムをデザインすることで、活動にじっくりと取り組みながら、柔軟性や深まりのある活動が期待される。

○　自然をフィールドとした感動体験や達成感を得られるプログラムを構成することで教師の専門性や指導力を発揮し、児童の意欲や能力を最大限に引き出すことが期待される。

「ゆとりある滞在型プログラムで失敗・成功体験を重視した取組」のポイント

◆児童が一つの活動にじっくり取り組み、失敗・成功体験を通して学んだことについて仲間と共有できる場を設定するなど、失敗・成功体験を「次に生かそう」と児童が思える手立てを教師が準備しておくことが大切である。

≫≫≫事例⑤（p.12）

「感動体験プログラムなどフィールドの特性を生かした取組」のポイント

◆「どこで活動するのか」とともに「どのような体験をさせるのか」を教師が意識し、フィールドの特性・環境・条件を最大限に生かし、学校での教育活動では経験できないプログラムを構成することが大切である。

≫≫≫事例⑥（p.13）

ゆとりある滞在型プログラムで失敗・成功体験を重視した取組

事例⑤　自分たちで火をおこし、野外炊事に挑戦

1　取組のねらい

○　火おこし器を使っての火おこし体験を通し、便利になった日常生活を振り返らせる。

○　仲間と協力して火をおこし、最後までやりとげようとする態度を養う。

2　全体の構想

事前体験活動(学校)

ア　火おこし器の作成と火おこし体験

→

自　然　学　校

イ　火おこし体験とその火を用いた野外炊事①

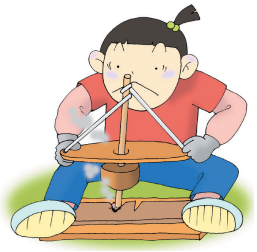
⇒

ウ　火おこし体験とその火を用いた野外炊事②

3　具体的な展開

ア　火おこし器の作成と火おこし体験　　事前体験活動(学校)

○火おこしに挑戦する。
- 持ち寄った道具を使い、自分で方法を考えながら火おこしに挑戦
- 火おこし器の作成
- 火種を炎にする体験（火を守る体験）



自　然　学　校

イ　火おこし体験とその火を用いた野外炊事①

- 火おこし器を用いた火おこし
- おこした火をかまどに入れて調理
- 会食時に火おこしや野外炊事の体験を互いに話し、活動の振り返り

ウ　火おこし体験とその火を用いた野外炊事②

○前回の活動での失敗・成功体験を生かし、再度同じ活動を実施する。

○前回と比べよくなった点について話し合う。
- 時間、手順、協力体制　等

4　ここを大切に

○　火がおきないと野外炊事ができないという使命感を持たせて取り組ませるとともに、何度も失敗を繰り返しながら、火をおこすという成功体験を味わわせる。

○　成功体験を保障するため、青少年教育施設関係者や専門家等の協力を得て、教師が事前に火おこしの体験をし、時間や手順を確認しておくことが大切である。

感動体験プログラムなどフィールドの特性を生かした取組

事例⑥　夜明けのドラマ「日の出」

1　取組のねらい

○　日の出という日常生活では意識していない自然現象に改めて着目させ、その神秘性に気付かせる。
○　観察する中で、感じたことや気付いたことを友達と共有させる。

2　全体の構想

事前指導

ア　日の出の時刻、方位調べ

自　然　学　校

イ　観察場所の設定 → ウ　日の出の観察体験 → エ　感じたことの共有

3　具体的な展開

ア　日の出の時刻、方位調べ

○現地での日の出の時刻、方位を調べる。（起床時刻を決める。）
○日の出の方向がどんな地形になっているかを地図などで調べる。

自　然　学　校

イ　観察場所の設定

○現地に出向いて周りの状況を把握し、観察場所をどこにするか決定する。
○場所が決まったら観察の目安となる目標物を決めておく。

ウ　日の出観察体験

○日の出の前と後を比べる。
・日の出の前の明るさと日が差し込めてきた時の明るさの違い
・肌で感じ取る気温の変化、空気の変化（においを含む）
・静寂の中での鳥のさえずりや羽ばたき、木々の音等
・空の色の変化

エ　感じたことの共有

○感じたことや気付いたことを発表する。
・友達と同じところ
・友達と違うところ
・自分では気付かなかったところ

4　ここを大切に

○　自らの感性を大切にさせるとともに、他者（友達）の感性も尊重させる。
○　視覚だけではなく、五感を働かせて日の出を感じさせる。
○　日の出の観察体験をもとにして、身近な自然現象の変化に着目させる。

資　料

■子どもにとっての体験活動の重要性

近年、子どもをめぐる課題として、人間関係をうまく作れない、集団生活に適応できない子どもの増加やいじめの陰湿化に代表される規範意識の低下、物事に創意をもって取り組む意欲の欠如、いわゆる「キレる」子どもの問題などが挙げられる。このような問題の背景として、少子化、都市化、情報化、核家族化等、社会環境の変化に伴い、例えば、次のような子どもたちの状況が考えられる。

①自然や地域社会と深く関わる機会の減少

物事を感覚的にとらえる自然体験や共存の精神、自他を大切にすることを学ぶ社会体験が減っている。

②集団活動の不足（「集団」から「個＝孤」へ）

社会性を体得していくための集団での活動の機会が減ってきている。

③物事を探索し、吟味する機会の減少

インターネットやマルチメディアの時代にあっては、子どもが膨大な量の情報に晒されており、現実に体験したことをもとにして、一つの物事に集中して考えたり、あれこれ思いをめぐらせる機会が減っている。

④地域や家庭の教育力の低下

本来、地域や家庭においてはぐくまれるべき早寝・早起きなどのしつけや基本的な倫理観・社会性の育成などが十分になされていないことがある。

「体験活動事例集～体験のススメ～」文部科学省（H20.1）より抜粋

■体験と感動体験

体　験

- 知的な学習の手段としての体験
  - ・体験を通すことにより、理解が容易になる。
  - ・体験を通すことにより、理解が深まる。
- 感　動　体　験
  - ・体験そのものから学ぶもの
  - ・生きることと一体化した体験

↓

人の心に深く刻まれ、人間形成に大きな影響を与える

- ・新たな自分を発見し、自分が役に立つ存在であることを認識し、変容していく自己を体験する。
- ・自ら問題解決を行うことは、生きていく自信につながる。

↓

感動は、「生きる力」の源である。

「生きる力をはぐくむ体験活動」兵庫県教育委員会（H12.12）より

体験活動は今！

学校では得難い体験活動の意義

■中央教育審議会答申「次代を担う自立した青少年の育成に向けて」（H19.1.30）

青少年が自立に向けて意欲を高め行動に当たっての手段・方法を身に付けるためには、机上の学習だけでは十分でなく、経験によって得られる技能の体感などの生きた知識、すなわち経験知（暗黙知）を体感することが欠かせない。経験知とは、失敗や苦労を重ねつつそれを乗り越え、挑戦を繰り返す中で体得できるものであり、また、このような試行錯誤を通じて、青少年は「自分にもできたのだ、がんばればできるのだ」と自らの成長を実感するとともに、判断力や選択能力等を培い主体性をはぐくむことができる。

■中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」（H20.1.17）

学校行事については、集団への所属感や連帯意識を深めつつ、学校の仲間や地域の人々のかかわり、協同の意義、本物の自然や文化の価値や大切さを実感する機会をもつことが重要である。これらのことを踏まえ、自然の中での集団宿泊体験や異年齢交流なども含む多様な人々との交流体験、文化的な体験などを重視する観点から、学校行事の内容について改善を図る。

方策 4　社会性や自立性等をはぐくむための集団活動の充実

【評価検証委員会の提言内容】

社会性をはぐくむプログラムの開発・設定

自然学校が集団活動を通して社会性や規範意識をはぐくむ場となるよう、集団活動の視点からプログラムを設定することが大切である。

こころを通い合わせ支え合う活動の設定

学校において、自分に自信がもてず、友達関係に不安を感じている子どもが、自然学校では、仲間と一緒に活動にチャレンジすることで、人間関係づくりや社会的自立への契機となるように活動を工夫することが大切である。

集団活動・生活を通してはぐくむ実践的な態度

自然学校を集団活動・集団生活体験の場ととらえ、自然学校での生活上のルールを子どもたち自身が作り、実践し、必要に応じて修正するなど、自主的、実践的な態度をはぐくむ好機とすることも大切である。

長期の宿泊体験の意義を生かした活動の重視

ホームシックを乗り越えるなど長期集団宿泊体験の意義や困難を乗り越える活動などを大切にし、自立心をはぐくむとともに、自然学校が集団への所属感や連帯感を深めつつ、仲間の大切さを実感する機会とすることが求められる。

【実践への期待！】

○　長期集団宿泊体験のよさを生かし、集団活動を通して、人間関係を深めたり規範意識を高めたりする活動が期待される。

○　一つのことにじっくり取り組みながら困難を乗り越える、長期集団宿泊体験ならではのプログラムを意図的に仕組むことで、自立性をはぐくむことが期待される。

「グループ活動や集団生活など社会性の育成を重視した取組」のポイント

◆人間関係を深める活動を重視するとともに、トラブルが生じた場合は、自分たちの力で解決する時間的・空間的なゆとりが大切である。

≫≫≫事例⑦（p.16）

「困難を乗り越えるプログラムなど自立性を重視した取組」のポイント

◆生活環境が異なる中で、様々な活動を通じて、友だちとの連帯感を深め、困難な状況やホームシックを乗り越える活動を工夫することが大切である。

≫≫≫事例⑧（p.17）

グループ活動や集団生活など社会性の育成を重視した取組

事例⑦　イカダをつくって水上へ漕ぎだそう

1　取組のねらい

○　イカダの組立て・乗船の活動を通して、仲間と協力することの大切さを味わわせる。

○　手づくりイカダの乗船体験を通して、自然に挑戦しようとする意欲を高め、冒険心をはぐくむ。

2　全体の構想

事前体験活動

ア　ロープワーク体験

→

自　然　学　校

イ　イカダの組立て ⇒ ウ　イカダ乗船 ⇒ エ　活動の振り返り

3　具体的な展開

ア　ロープワーク体験　事前体験活動

○様々なロープワークを体験する。
- ロープの種類に応じた結び方
- 結び付けるものに応じた結び方

○強固なイカダを組み立てるためのロープワーク練習
- 木とポリタンクで組み立てるイカダ
- 木だけで組み立てるイカダ
- 竹だけで組み立てるイカダ

自　然　学　校

イ　イカダの組立て

○グループで協力し、手順を確認し合って確実に作業を進める。
- 事前体験活動での学びを生かした組立て
- 結び方をみんなで協力して確認

ウ　イカダ乗船

○協力し合ってイカダを乗りこなす。
- 構成員に応じたメンバーの乗船位置の工夫
- 力を合わすことができる漕ぎ方やかけ声の工夫
- ゴール地点までの航路をみんなで確認

エ　活動の振り返り

○自分の役割を果たし、みんなと協力できたかを振り返る。

4　ここを大切に

○　一人一人の力を最大限に発揮できるように、グループ内での役割分担を明確にさせる。

○　協力できていた場面を具体的にとらえ、振り返らせることで、達成感や成就感を味わわせる。

困難を乗り越えるプログラムなど自立性を重視した取組

事例⑧　野外での「一人泊」に挑戦しよう

1　取組のねらい

○　一人で野外泊をすることで、未知のことに挑戦しようとする心情を培う。

○　マイテントを作り上げ、一人泊ができた喜びを味わわせる。

2　全体の構想

事前指導

ア　製作計画

自　然　学　校

イ　材料収集 → ウ　マイテント製作 → エ　マイテント宿泊

事後指導

オ　「一人泊」体験発表会

3　具体的な展開

ア　製作計画

○マイテント製作の計画を立て、ダンボール、ビニールシート等あらかじめ準備が必要なものを用意する。

自　然　学　校

イ　材料収集

○自然物でマイテントを製作する場合、現地で材料を収集する。

○材料収集とともに、野外泊に適した場所を探す。

あらかじめ準備してきた材料に加えて、自然の材料も生かして作ってみよう。

ウ　マイテント製作

○テントの材料や、製作方法を自分で工夫する。

ダンボールとビニール袋で、作ってみよう。

エ　マイテント宿泊

○宿泊方法を選択し、テント泊を実施する。

一人で寝るのは不安だよ～。今日は友だちと一緒に寝て、明日こそは…。

・１つのテントに泊まる人数や、過ごす時間帯、設営する場所などの工夫

一人泊へのステップ

今日は屋内で一人用テントを使って泊ってみよう。明日は…。

野外でマイテントに泊まるぞ！

オ　「一人泊」発表会

○野外での「一人泊」を通し、自己の成長や感じたこと等について振り返る。

○取り組んだ過程を振り返り、お互いの頑張りを認め合う。

4　ここを大切に

○　マイテント宿泊前後の日程にゆとりを持たせ、児童の健康面、安全面に配慮する。

○　活動時間や場所、宿泊人数等の選択肢を工夫し、一人一人の児童の実態に合わせて段階的に野外での「一人泊」に挑戦できるよう配慮する。

資　料

■社会性や自立性等をはぐくむための集団活動の実際

イカダづくり

マイテント(段ボールハウス)

児童の感想より

まず、木など、イカダに必要な道具を用意して、組み立てていきました。なかなかロープがうまい具合にむすべなくてけっこう苦労しました･･･中略･･･

海に出発するとき、わたしは不安でした。「ちゃんとうくかな」とか、「すぐにちんぼつしちゃうんじゃないか」というふうに思っていましたが、実際乗ってみると、意外にちゃんとしずまずにういていたので、すごくびっくりしたし、うれしかったです。こいでみるとちゃんとこげないので、とても大変でした。

･･･中略･･･　わたしは、いかだを作る時、みんながちゃんと協力して助け合って、上手に作れたと思います。すごくいい思い出になりました。

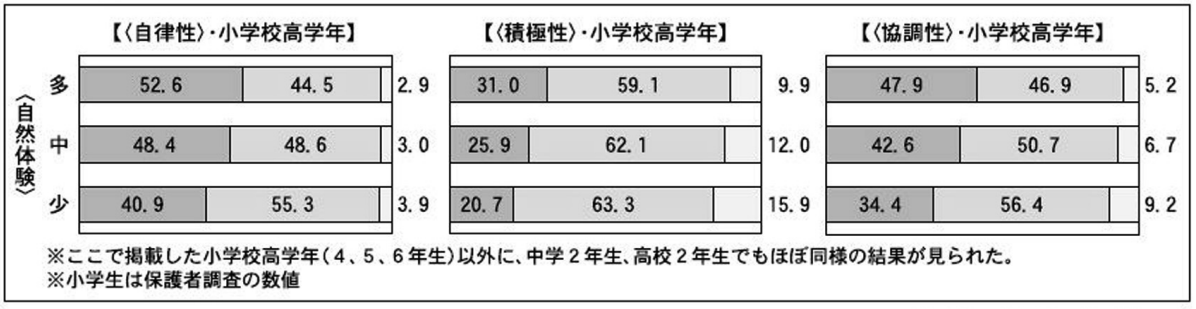
体験活動は今！

体験活動と子どもの自立

○　学校外で自然体験活動を多くしている青少年ほど、自立している青少年が多い。

○　学校外での自然体験活動の状況と青少年の自立的行動習慣の関係を見ると、学年を問わず、体験活動を多くしている青少年ほど、〈自律性〉や〈積極性〉、〈協調性〉といった「自立的行動習慣」の得点が高い傾向が見られる。

n=6009



学校外での自然体験活動と自立的行動習慣の関係（単位は％）　□高 □中 □低

「青少年の体験活動等と自立に関する実態調査」 独立行政法人国立青少年教育振興機構（H20.3）より

方策５　子どもの成長過程を踏まえた体験活動の充実

【評価検証委員会の提言内容】

命を尊重する心をはぐくむ自然学校

生活科や３年生の環境体験事業での学習や体験を踏まえ、自然学校では、自らの命と自然界の命との呼応や、命の尊さの認識などを発展的に学ぶための指導の工夫が大切である。

発達段階に応じた体験活動の系統的な実施①

３年生の環境体験事業では、自然にじっくりと触れ、自然を感じることをねらいとし、自然学校では、自然の多様性に気付くといった系統性が考えられる。

発達段階に応じた体験活動の系統的な実施②

学校で実施している自然体験、社会奉仕体験、勤労生産体験、芸術・文化体験、交流体験などのねらいを明確にし、小学校６年間を見通した体験活動の継続的・系統的な実施が大切である。

【実践への期待！】

○　環境体験事業（3年生）との関連を図り、自然学校を「命」をテーマとした系統的な環境学習の場とすることが期待される。

○　自然学校では、高学年として自己を見つめさせるためにプログラムの選択を取り入れるなど、小学校６か年を見通した体験活動プログラムを構築することが期待される。

「環境体験事業との関連を図った取組」のポイント

◆自然学校を環境学習の場とする際には、「①環境に対する感受性」「②環境に関する見方・考え方」「③環境へ働きかける実践力」をねらいとして、環境体験事業の「活動」、「内容」、「目標（育てたい資質・能力）」のどのレベルとの関連を図るのかを明確にすることが大切である。

≫≫≫事例⑨（p.20）

「高学年として自己を見つめさせる活動を取り入れた取組」のポイント

◆選択プログラムを構成する際には、「①活動前の教師の情報提供」「②自己認識に基づき、目的意識をもって選択させる」「③活動後の自己を振り返らせる活動」というプロセスを重視するとともに、各活動の質を高めることが大切である。

≫≫≫事例⑩（p.21）

環境体験事業との関連を図った取組

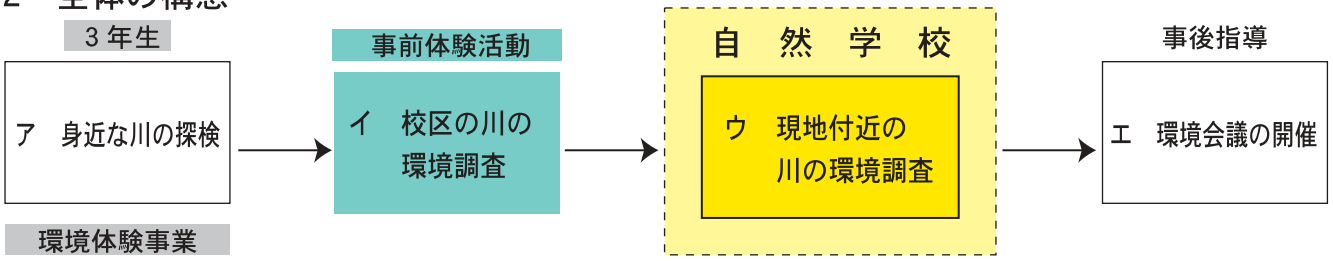
事例⑨　「環境」と「人」について考えよう

1　取組のねらい

○　日常生活と自然環境が密接に関係していることを実感させる。

○　異なる場所の自然環境の違いを比較し、自然環境を守る大切さに気付かせる。

2　全体の構想



3　具体的な展開

ア　身近な川の探検　環境体験事業（3年生）

○身近な川に生息する生き物に触れる。
- 川やその周辺に存在する命の発見

イ　校区の川の環境調査　事前体験活動

○調査内容・方法を計画し、校区の川の水生生物調査等を行う。
- 調査場所、時間、方法
- 水生生物調査
- 水質調査
- 校区の川の環境マップづくり

自　然　学　校

ウ　現地付近の川の環境調査

○現地付近の川の環境調査を行い、校区の川と比較する。
- 水生生物調査
- 水質調査
- 川流域の観察
- 現地付近の川の流域環境マップづくり

○川の環境保全活動を行っている地域の人と交流する。
- 調査発表会（地域の方を招待）
- 昔と今の環境の変化や、環境を守る取組について聞き取り

エ　環境会議の開催

○保護者などにも参加を呼びかけ、自然学校の取組を報告するとともに、環境を守るために自分たちにできることを話し合う。
- 環境調査や交流の結果の発表
- 他学年、保護者、校区の人との意見交換

4　ここを大切に

○　3年生の環境体験事業の取組を踏まえ、事前体験活動との関連も考慮しながら、自然学校のねらい・活動内容を考えることが大切である。

○　6年生理科の「生物と環境」と関連付けて学習することも考えられる。

高学年として自己を見つめさせる活動を取り入れた取組

事例⑩　見付けよう！ステキな自然、ステキな友達、ステキな自分

1　取組のねらい

○　自分の力をためすことをねらいとして選択プログラムを計画・実行し、自分自身を見つめさせる。

○　友達や自分の活動を振り返り、頑張った姿を発見することで自分の成長に気付かせる。

2　全体の構想

事前指導

ア　選択プログラムの活動計画

→

自　然　学　校

イ　選択プログラムの実施

⇨

ウ　「ステキな仲間」発表会

→

事後指導

エ　「ステキな自分」発表会

3　具体的な展開

ア　選択プログラムの活動計画

○「自分をもっとステキにするために」というテーマで各自が自然学校のめあてを考え、現地で挑戦する活動（選択プログラム）の計画を立てる。

・自分の得意なこと　　・自分の苦手なこと

・やったことがないが挑戦してみたいこと

○教師が現地の自然環境や施設・設備など活動にかかわる情報を与えて、計画の参考にさせる。

自　然　学　校

イ　選択プログラムの実施

○個人だけではなく、グループや全体で挑戦する機会を設ける。

○選択するプログラムを見直す機会を設ける。

工作が苦手だけれど、ナイフを使って野外炊事や食事会で使う道具を作ってみよう。

ウ　「ステキな仲間」発表会

○友達の頑張っていた様子を全体の場で発表しあう。

グループで登山に挑戦したときに、○○さんは先頭を歩いてみんなを引っぱってくれたよ。

エ　「ステキな自分」発表会の実施

○自然学校でチャレンジしたことや達成できたことを「自分への表彰状」にまとめる。

○授業参観などで「自分への表彰状」を発表する。

4　ここを大切に

○　児童が主体的に計画できるように、教師が様々なフィールドの情報を提供する。

○　他者から認められる場や、自分の成長に気付かせる活動を設定することで、自尊感情をはぐくむ。

資　料

■環境体験事業と自然学校の系統について

	3年生：環境体験事業	5年生：自然学校
趣旨	人間形成の基礎が培われる時期に、命の営みやつながり、命の大切さを学ぶため、自然の中で一粒の種を世話し続けることにより、花が咲き、実がなり、子どもたちが大きな驚きの中で命の営みや大切さを知るといった体験等、自然にふれ合う体験型環境学習を行う。	学習の場を教室から豊かな自然の中へ移し、児童が人や自然、地域社会とふれ合い、理解を深めるなど、さまざまな体験活動を通して、自分で考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する力や、生命に対する畏敬の念、感動する心、共に生きる心を育むなど、「生きる力」を育成することを目的とする。
環境教育の視点：環境に対する感受性	身近かな生き物に直接ふれることにより、自然のすばらしさや不思議さに感動し、命の尊さを感じ取る。	美しいものや自然の神秘さに感動する心や、人間の力を超えたものに対する畏敬の念をもつ。
環境教育の視点：環境に関する見方・考え方	季節による環境の変化や、生き物の枯死など命の営みを認識する。	様々な自然の中から自ら問題を見付け、問題を解決するための能力を身に付ける。
環境教育の視点：環境に働きかける実践力	自然の中で一粒の種を世話し続けることにより花が咲き、実がなるなど、命あるものを大切に育てる。	自然や資源が限りあることを認識し、自ら責任ある行動をとり、他者と協力して環境保全に取り組む。

体験活動は今！

環境教育のねらい

■小学校における環境教育のねらい

①環境に対する豊かな感受性の育成

自分自身を取り巻くすべての環境に関する事物・現象に対して、興味・関心をもち、意欲的にかかわり、環境に対する豊かな感受性をもつことができるようにする。

②環境に関する見方や考え方の育成

身近な環境や様々な自然，社会の事物・現象の中から自ら問題を見付けて解決していく問題解決の能力と、その過程を通して獲得することができる知識や技能を身に付けることによって、環境に関して、持続可能な社会の構築につながる見方や考え方をはぐくむようにする。

③環境に働きかける実践力の育成

環境保全のためにどのような生活様式をとり、どのような実践的な行動をとるべきかなどについて考えて行動することや、自ら責任ある行動をとり、協力して問題を解決していくことなどができるようにする。さらに、日々の生活における働きかけだけでなく、持続可能な社会の構築に向けて、将来においてもよりよい環境を創造するための働きかけをすることができる実践力も培うようにする。

■環境教育で重視する能力と態度（例）

・課題を発見する力・計画を立てる力・推論する力・情報を活用する力・合意を形成しようとする態度
・公正に判断しようとする態度・主体的に参加し、自ら実践しようとする態度

「環境教育資料（小学校編）」国立教育政策研究所教育課程研究センター（H19.3)より

方策 6　家庭や地域との一層の連携を図る取組の充実

【評価検証委員会の提言内容】

家庭と連携し、家庭の教育力を高める工夫①

自然学校の説明会などを工夫するとともに、個々の子どもの状況を十分に把握するための保護者とのコミュニケーションを十分に図ることが大切である。

家庭と連携し、家庭の教育力を高める工夫②

実施後に、具体的なエピソードなどをもとに基本的な生活習慣や規範意識の不十分な状況を保護者に伝え、家庭との連携により改善を図るなど、自然学校を契機に子どもの社会的な自立等に向けた家庭の教育力を高めることも大切である。

ボランティアの参画を得た取組

ボランティアの導入にあたっては、導入目的、支援を得る内容、教師の役割を明確にして実施することが大切である。

教育委員会や関係機関と十分な連携を図る取組

体験活動の充実や健康・安全面の確保、特別な支援を要する児童の活動を支援する観点から教育委員会の指導・支援や医療機関など、関係機関との連携を図る取組が大切である。

【実践への期待！】

○　自然学校への理解を図ることはもちろん、自然学校での子どもの成長について保護者と意見交換する場を設けることで、自然学校を契機にした広い観点からの家庭との連携が期待される。

○　ボランティアなどが計画段階から参画することにより、自然学校の体験活動の幅が広がることとともに、家庭や地域と連携した体験活動の一層の充実が期待される。

「家庭との連携を重視した取組」のポイント

◆家庭の教育力を高めるという視点から、活動内容の報告だけではなく、自然学校を通して身に付いた資質・能力についても保護者に示し、子どもの成長を見据えた連携を図ることが大切である。

≫≫≫事例⑪（p.24）

「地域との連携を重視した取組」のポイント

◆自然学校に協力を得るボランティア等とのパートナーシップに基づき、プログラムづくりへの助言を得たり、活動後に一緒に児童の学びを振り返ったりする活動を行うなど、事前・自然学校・事後を通した連携を図ることが大切である。

≫≫≫事例⑫（p.25）

家庭との連携を重視した取組

事例⑪　自然学校フォーラムの実施

1　取組のねらい

○　自然学校の記録をホームページなどで知らせ、保護者や地域の理解を得る。

○　児童の成長を保護者と共有するとともに家庭との連携を通して、生活習慣や規範意識などの不十分な点を改善できるようにする。

2　全体の構想

ア　自然学校説明会の実施 → 自　然　学　校［イ　ホームページなどを使った自然学校の情報公開］ → 事後指導　ウ　自然学校フォーラムの実施

3　具体的な展開

ア　自然学校説明会の実施

・自然学校の趣旨と具体的なねらい

自　然　学　校

イ　ホームページなどを使った自然学校の情報公開

○児童の感想などを織り交ぜながら、活動内容が保護者に伝わるように工夫する。
○電子メールなどを利用して自然学校に対する意見を保護者や地域の人などから集める。

ウ　自然学校フォーラムの実施

○様々な人に参加を呼びかける。
　・保護者、地域の人、現地でお世話になった人、自然学校の指導者　等
○児童に自然学校で体験したことを発表させる。
　・自然学校でしか得られない体験のエピソード
　・自然学校を通して成長した点　等
○「子どもの体験活動を豊かにするために」などのテーマでパネルディスカッションを行う。
　・パネリスト…児童、保護者、教員、地域の人　等
　・自然学校を通した児童の変容について
　・家庭、地域、学校の連携について　等

4　ここを大切に

○　保護者の不安を払拭するよう、日ごろからコミュニケーションを十分にとる。

○　自然学校フォーラムでは、保護者や地域の人などから集めた意見や児童の発表をもとにして児童の成長を確かめ合い、家庭・地域・学校の連携のあり方を話し合う。

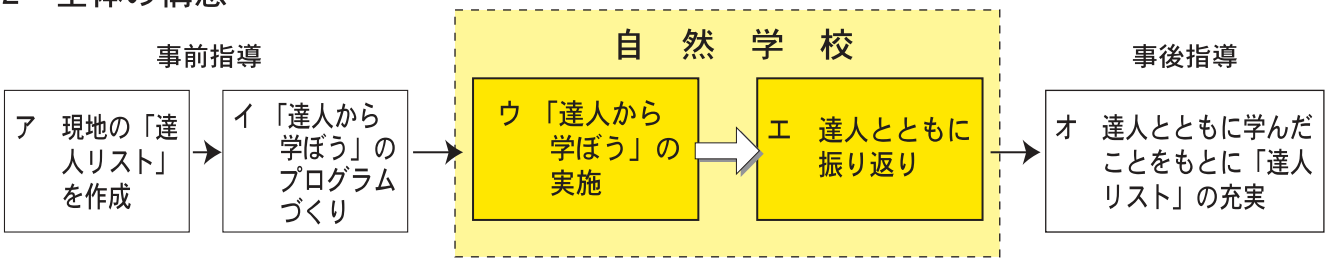
地域との連携を重視した取組

事例⑫　地域の達人とともに

1　取組のねらい

○　活動に協力してもらう「地域の達人」を探す活動を通して、自然学校に主体的に取り組ませる。
○「地域の達人」とのふれあいを通して、人と人とのつながりのすばらしさを実感させる。

2　全体の構想



3　具体的な展開

ア　現地の「達人リスト」を作成

○現地の様々な分野の達人を探し、「達人リスト」を作成する。
家族、知人、現地市役所・町役場等の情報やインターネットを活用して探す。
(例)木登り達人、自然観察達人、匠の技達人、伝承芸能達人、昔遊び達人、郷土料理達人　等

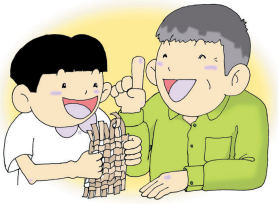
イ　「達人から学ぼう」のプログラムづくり

○自然学校で現地の達人から学びたい内容ごとにグループをつくる。
○グループで「達人リスト」から学びたい達人を選び、手紙・電話等で協力をお願いする。
○協力してもらえる達人から助言を受けながら、自然学校で達人から学ぶ活動のプログラムを考える。

自　然　学　校

ウ　「達人から学ぼう」

○グループごとに達人と活動する。
○達人の技のすごさや達人の思い・考え方を学ぶ。
・山、森、川など自然をフィールドとした活動
・地域の施設での活動



エ　達人とともに振り返り

○野外炊事の食事会に達人を招待する。
・グループごとにテーブルを準備
・達人を囲んで活動の振り返り
・全体で意見交換

オ　達人とともに学んだことをもとに「達人リスト」の充実

○達人とともに行った活動を振り返り、「達人リスト」を充実させ、次年度以降の自然学校や他の教育活動に生かす。

4　ここを大切に

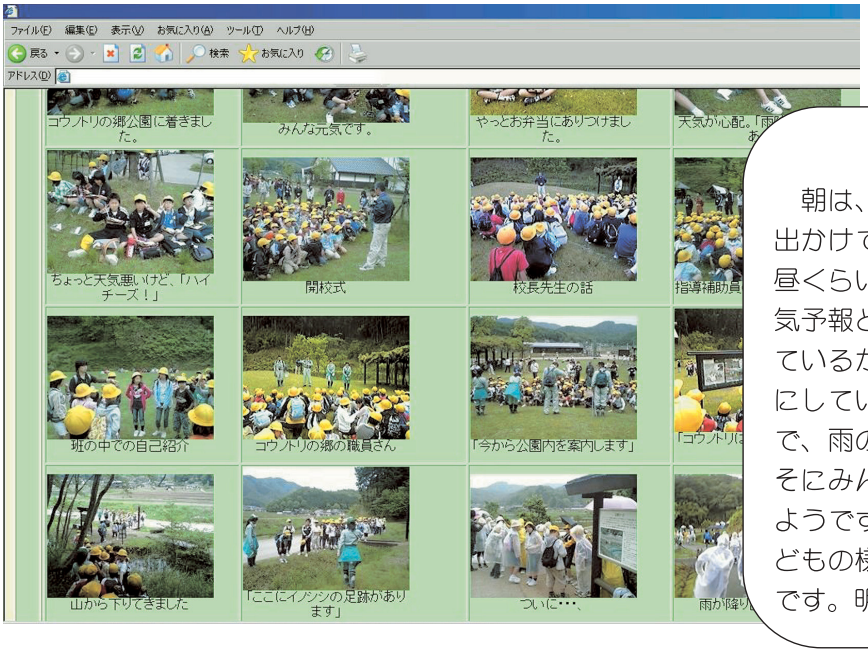
○　活動への協力、プログラムへの助言、活動後の振り返りなど、達人への依頼を児童自らが行い、主体的な活動にするとともに、教師も打ち合わせを十分に行い、活動を円滑に実施する。

○　達人を活動施設に招くだけではなく、児童が地域に出ていくことで、家庭や地域と連携した体験活動を実施する。

資　料

■自然学校を紹介したホームページ

５月〇日～〇日まで自然学校へ行きます。可能な部分でＬＩＶＥ中継をしていきます。
このページをご覧になった感想やコメント等を電子メールでお寄せください。



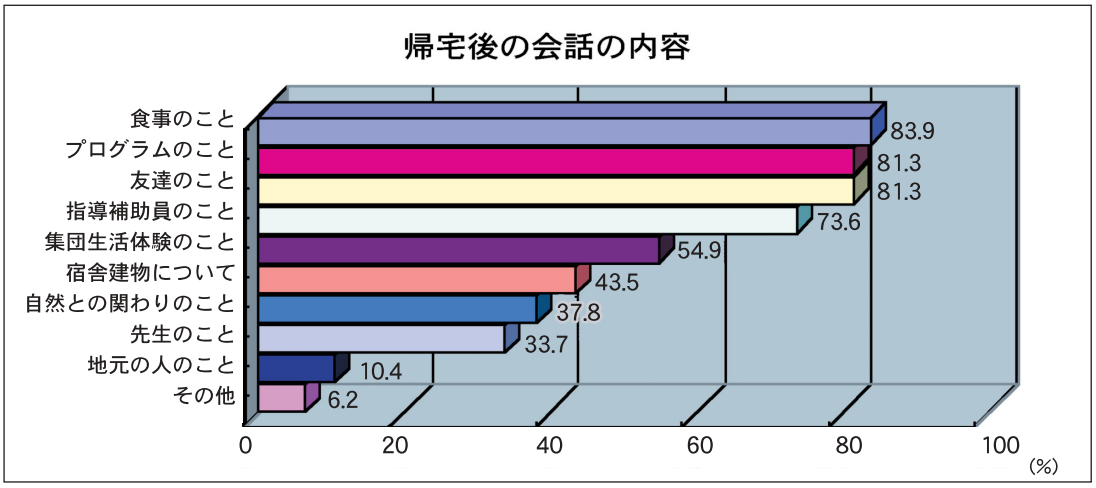
保護者の感想より

朝は、とってもいい天気で安心して出かけていく姿を見られたのですが、昼くらいからポツポツと降り出し、天気予報どおり雨になりました。どうしているか心配していましたが、楽しみにしていたコウノトリが見られたようで、雨の中の登山もし、親の心配をよそにみんな楽しく元気に過ごしているようですね。こうしてパソコンから子どもの様子が見られるのは、うれしいです。明日からも楽しみにしています。

体験活動は今！

保護者との連携

児童が自然学校から帰ってから、保護者と交わした会話の内容を調査し、児童が自然学校で強く関心を抱いたことや、自然学校を通した子どもの変容などについて保護者と話し合うことで、自然学校を契機に保護者との連携を一層深める取組も考えられる。



「生きる力を育む自然学校」 自然学校評価検証委員会（H20.3）より

方策 7　自然学校の弾力的な実施

【評価検証委員会の提言内容】

自然学校の基本理念の重視

「子どもたちが自然とふれあい、自然の神秘さ・優しさ・力強さなどに感動し、豊かな感性、問題解決能力、粘り強さなどを培うとともに、人とのふれ合いを通して、生きる喜びや協調性、社会性を身に付ける必要がある」という自然学校スタート時の理念を重視することが大切である。

自然の中での集団宿泊活動などの体験活動の重要性

自分に自信がもてず、将来や人間関係に不安を感じているといった子どもたちの現状を踏まえると、子どもたちに、他者、社会、自然・環境とのかかわりの中で、これらとともに生きる自分への自信をもたせる必要がある。

各学校の創意工夫した特色ある取組の充実

体験活動を子どもの発達段階に応じて体系的に実施する観点から、環境体験事業との関連を図るなど、自然学校を小学校６年間の育ちの中にどのように位置付けるかを明確にし、自然学校をその場限りの活動に終わらせないよう各学校が創意工夫した取組を行うことが大切である。

【実践への期待！】

○　各学校において、子どもの実態を踏まえ、自然学校で育てる能力・態度や環境体験事業との関連を考慮しながら、実施期間を適切に定めるとともに、取組内容を焦点化するなど創意工夫したプログラムを実施することにより、より教育効果が高い自然学校が期待される。

○　体験活動の教育的な価値を最大限に生かす観点から、学校や親元を離れた、より長期にわたる自然学校を実施することで、子どもたちが知的好奇心や探究心とともに、自己有用感や他者との協調性を実践的に学ぶことが期待される。

「まとまりのある自然学校（４泊５日）の取組」のポイント

◆環境体験事業との関連や、テーマを絞り込んだ活動内容に留意してプログラムを構成するとともに、１日目の午前から５日目の午後を通して、テーマに即した活動を実施することが大切である。また、事前・事後体験活動の充実により、従前の５泊６日と同様な効果が期待できる。

≫≫≫事例⑬（p.28）

「集団での学びを核とした長期計画（６泊７日）の取組」のポイント

◆集団活動や長期集団宿泊体験などの教育的意義を踏まえたテーマによるプログラムを計画し、１日目には自然散策などによって子どもが発見した課題をもとにグループづくりを行うなど、従来は事前に学校で実施していた活動に現地でじっくりと取り組むことが期待される。

≫≫≫事例⑭（p.29）

まとまりのある自然学校（４泊５日）の取組

事例⑬　活動のつながり、深まりを大切にした自然学校

1　取組のねらい

○　ねらいの明確化・焦点化（さらに具体的なねらいの設定）を図る。

○　活動相互のつながり、関連性を重視する。

2　全体の構想

事前指導

ア　ねらい、テーマの決定（学級活動等）

→

事前体験活動

イ　森林と触れ合う体験（学校近隣の里山）

→

自　然　学　校

ウ　自然を感じ、自然で作ろう

４泊５日

3　具体的な展開（５泊６日と４泊５日の比較）

５泊６日の自然学校

	午　前	午　後	夜
ねらい	［A小学校の例］ ・自然との感動的な出会い ・集団での学びと連帯感		
1日目	入校式	隠れ家づくり（班）	班旗づくり（班）
2日目	登山（全）		星空観察（全）
3日目	サイクリング（全）		家の人に手紙を書こう（個）
4日目	野外炊事（班）	フリータイム	ナイトハイク（班）
5日目	自然物クラフト（個）	隠れ家撤収（班）	キャンプファイヤー（全）
6日目	壁新聞づくり（班） 退校式		

事前体験活動と４泊５日の自然学校

	午　前	午　後	夜
ねらい	［より具体的なねらいに］ ・自然を感じ、自然で作ろう。 ・友達との絆を深める。		
事前体験	森林と触れ合う体験（学校近隣の里山） ・自然学校での隠れ家づくりなどの活動を想定した体験活動 （ロープワーク、ノコギリ・ナイフ等を使ったものづくりなど）		
1日目	入校式	施設探検（班） ・隠れ家づくりの場所の確認と材料集め	活動確認（班） ・活動内容、ねらい ・テーマの確認
2日目	登山【自然散策、ﾊｲｷﾝｸﾞも可】（班） ・途中で自然観察、クラフトの材料集め （ルートは、班ごとに決定）		隠れ家づくりの計画（班） ・隠れ家のデザイン等
3日目	自然物クラフト（班） ・食卓飾り、隠れ家の看板制作	野外炊事（班） ・班制作のｸﾗﾌﾄで飾付【簡単メニュー】	カウンシルファイヤー（班） ・ねらい、テーマの振り返り
4日目	隠れ家づくり（班） ・デザインをもとに隠れ家づくり	隠れ家づくり（班） ※後片付け等の時間を必ず確保	ナイトハイク（班） ・暗闇の体験 ・途中で星空観察
5日目	自然物クラフト（個）	片付け 退校式	

※事前体験活動では、ロープワークなど木と触れ合う体験活動を実施し、「自然を感じ、自然で作ろう」をめあてとする自然学校につなげる。

※自然学校では、隠れ家づくりの材料集め（１日目）→ 隠れ家づくりの計画（２日目）→ 隠れ家の看板制作（３日目）→ 隠れ家づくり（４日目）につながる活動を組み込んでいる。

4　ここを大切に

○　事前（あるいは事後）体験活動を充実させることにより、４泊５日であっても従来同様の自然学校の教育的効果が期待できる。

○　漠然としたねらいではなくより具体的なねらいを設定し、ねらいに迫るための核となる活動を明確にする。

○　各活動が、単発で終わらないように活動相互の関連を意図したプログラムを編成する。

集団での学びを核とした長期計画（６泊７日）の取組

事例⑭　ゆったり、じっくり、しっかり取り組む自然学校

1　取組のねらい

○　基本的生活習慣の確立、規範意識や自己有用感の高まりなど社会的自立へのステップとしての長期宿泊体験活動の教育的意義を踏まえたゆとりのある自然学校をめざす。

○　集団としての高まりが期待できる活動内容を工夫する。

2　全体の構想

自　然　学　校

ア　班編成やめあて・ルールづくり → イ　活動内容を話し合って実施 → ウ　班別会議等で見直し活動を修正（PDCAサイクル）

６泊７日

→ エ　自然学校で培った集団としての高まりを生かす場面の設定

事後指導

特別活動

3　具体的な展開（5泊6日と6泊7日の比較）

５泊６日の自然学校

	午　前	午　後	夜
事前指導	特別活動(学級活動) ・班編成や活動内容の決定、ルールづくり 等		
1日目	入校式	施設散策（班）	リーダーとの交流会（全）
2日目	棒焼きパン（全）	隠れ家づくり（班）	星空観察（全）
3日目	紙すき（個）	自然物クラフト（個）	家の人に手紙を書こう（個）
4日目	野外炊事（班）	フリータイム（全）	ナイトハイク（班）
5日目	登山（全）		キャンプファイヤー（全）
6日目	隠れ家撤収（班） 退校式		
事後指導	特別活動（学級活動） ・活動内容の振り返りと報告 ・集団活動や集団生活に関するアンケート 等		

・事前に、班編成や活動内容の決定、ルールづくり等を行う時間（学級活動等）が必要である。
・自然学校実施期間中に、班や活動内容を変更するための時間の確保が難しい。

６泊７日の自然学校

	午　前	午　後	夜
1日目	入校式	施設探検（班） ・隠れ家づくり、選択活動の場所・内容も確認	全体会議（全・班） ・隠れ家づくりの班編成、めあて・ルールづくり
2日目	隠れ家づくり ①（班） ・隠れ家づくりの材料集め、ロープワーク	隠れ家づくり ②（班） ・協力して隠れ家を作ろう	班別会議（班） ・隠れ家づくりの評価、改善点の相談
3日目	隠れ家づくり ③（班） ・隠れ家で遊ぼう		班別会議（班） ・選択活動のルールづくり、活動内容決定
4日目	選択活動 ①（班）　活動の確認と準備 ※クラフト、ハイキング等は半日単位で実施、登山等は終日実施		選択活動 ②（班） ・ナイトハイキング、星空観察等
5日目	選択活動 ③（班）　前日の活動の振り返り ※選択活動 ①と同じ活動や新たな活動の実施も可		班別会議（班） ・選択活動の評価、改善点、変更の相談
6日目	選択活動 ④（班）　変更した活動内容で実施 ※選択活動①～③の経験と班別会議（夜）を基にして、児童がよりフィールドの特色を生かし、主体性を発揮できる活動を選択して実施		キャンプファイヤー（班） ・選択活動の報告を兼ねる
7日目	隠れ家を撤収（班） ・選択活動等での活用を想定	片付け 退校式	
事後指導	特別活動（学級活動） ・活動内容の振り返りと報告 ・集団活動や集団生活に関するアンケート 等		

・班編成やめあて・ルールづくり等を事前に行わず、自然学校実施期間中に実施しながら修正していく。
・ＰＤＣＡサイクルを重視したプログラム編成

4　ここを大切に

○　６泊７日により現地で具体的な事前指導ができる。

○　自然学校実施期間中に、Ｐ(目標・計画)、Ｄ(実行)、Ｃ(評価・改善)、Ａ(次の活動への反映)サイクルが十分に機能するよう、活動の流れを組み立てる。

資　料

「事前・事後体験活動」の例

※事前・事後体験活動の説明は、本資料の p.2 を参照のこと。

◆自然学校での活動を想定した野外炊事・テント設営体験

事前体験活動（学校等）		自然学校
・校庭でかまど組み、野外炊事とテント設営の体験	→	・野外活動施設での野外炊事、テント設営、宿泊

◆自然学校での活動を想定した火おこし体験　本資料 p.12「事例⑤」参照

事前体験活動（学校等）		自然学校
・火おこし器の作成と火おこし体験	→	・火おこし体験とその火を用いた野外炊事、キャンプファイヤー

◆自然学校での活動を想定したロープワークなどの体験　本資料 p.16「事例⑦」・p.28「事例⑬」参照

事前体験活動（学校等）		自然学校
・ロープワーク体験	→	・イカダの組み立て、乗船 ・「隠れ家」づくり

◆実施場所との環境比較を行うための調査・探検活動　本資料 p.20「事例⑨」参照

事前体験活動（校区等）		自然学校
・校区の川の環境調査	→	・現地（自然学校実施地域）付近の川の調査

◆校区の公民館等を利用した集団宿泊体験

事前体験活動（校区の公民館等）		自然学校
・校区の公民館や学校等での集団宿泊体験	→	・野外活動施設での長期集団宿泊体験

◆自然学校での植樹・間伐体験

自然学校		事後体験活動（自然学校で利用した施設と周辺の里山）
・里山での植樹 ・間伐体験、椎茸の菌打ち	→	・植樹した木の成長を観察、下草刈り ・落ち葉かき、腐葉土づくり ・間伐体験、間伐材での炭焼き

兵庫県の自然学校のあゆみ

昭. 62年度	こころ豊かな人づくり懇話会の設置
昭. 63年度	５泊６日の自然学校を実施
平. 元年度	自然学校指導補助員・救急員等を確保する取組を開始
平. ３年度	公立全小学校を対象に実施（～以降全校実施）
平. ６年度	県立南但馬自然学校開校
平. ９年度	自然学校推進事業検討委員会の設置
	「自然学校１０周年記念誌」の発行
平. 11年度	「生きる力をはぐくむ体験活動-自然学校を核にした体験活動の取組-」の発行
平. 13年度	自然学校推進事業検討委員会の設置
平. 14年度	自然学校充実プランの策定
平. 15年度	県立南但馬自然学校開校１０周年シンポジウムを開催
平. 19年度	自然学校評価検証委員会の設置
	「自然学校推進事業２０年目の評価検証 生きる力を育む自然学校」の発行
平. 21年度	自然学校の弾力的な実施

背景となる出来事

平. 7　阪神・淡路大震災

平. 8　中教審答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」

平. 9　心の教育緊急会議

平.10　「トライやる・ウィーク」の実施

中教審答申「幼児期からの心の教育の在り方について」

平.13　学校教育法・社会教育法の一部改正

平.14　完全週休5日制の実施

中教審答申「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等」

平.15　兵庫の教育改革プログラムの策定

平.17　中教審答申「新しい時代の義務教育を創造する」

平.18　教育基本法の改正

平.19　学校教育法の改正

平.20　中教審答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について」

小学校学習指導要領の告示

作成協力者（順不同）

兵庫県教育委員会阪神北教育事務所	指導主事	土 本 純 平
兵庫県教育委員会東播磨教育事務所	指導主事	長谷川 珠里
兵庫県教育委員会北播磨教育事務所	指導主事	登　光 広
兵庫県教育委員会中播磨教育事務所	指導主事	圓 田 元 彦
兵庫県教育委員会但馬教育事務所	指導主事	古 橋　衛
兵庫県教育委員会丹波教育事務所	指導主事	堀　博 文
兵庫県教育委員会淡路教育事務所	指導主事	谷　宜 憲
兵庫県立南但馬自然学校	主任指導主事兼指導課長	東　智 之
兵庫県立南但馬自然学校	指導主事	髙 見 忠 宏

イラスト作成　古 橋　衛

自然学校実践事例集

－自然等との感動的な出会い、集団での学びと連帯感、社会的自立へのステップ－

平成21（2009）年３月発行

編集発行　　兵庫県教育委員会

所在地　　〒650-8567　神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

電　話　　(078)341-7711（代表）